

日本三大民謡「磯節」を全国に広めた元漁師

大洗の海岸が見渡せる大洗町磯浜町の松林に「磯節発祥の碑」がひっそりと建っている。県道173号(大洗海岸通り)に面した大洗観光協会の駐車場から階段を登ると、太平洋に向かって建つ御影石の碑がある。碑文にはこう書かれている。

「磯節は古くから当地方の船唄として唄われ明治の初期祝町の粹人渡辺竹楽房が音律を整えその後本町生まれの名人関根安中が全国に広めた郷土芸術である。茲に本場磯節の保存を希い、磯節まつりを記念してその起源を刻し永く後世に伝えるものである。昭和三十九年五月、大洗町長、加藤清 記」

磯節というと、次の歌詞が有名だ。

へ磯で名所は大洗さまよ 松が見えますほのぼのと
へ水戸をはなれて東へ三里 波の花散る大洗

これら磯節の歌詞数は、百を超えるというから驚きである。

この磯節を全国に広めた立役者こそ、碑文に書かれている関根安中(以下、安中と略)

(1877-1940)である。

安中は地元漁師、関根京助の長男として、現在の大洗町磯浜町に生まれた。本名は丑太郎。父同様、漁師として海を仕事場としていた。

ところが、一人前になった18、9歳の頃、眼の病気を患い視力を失った。「幸い全盲というのではなく、日中ならツエをつかずになんとか歩けた。目の前に手のひらを差し出せば指の一、二本は判別できた」(『茨城の顔』)。

やむなく生活の糧をマッサージ業に求めた安中は、やがて自らの運命を変える本県が生んだ名横綱、第19代横綱常陸山谷右衛門と出会うことになる。明治34年(1901)頃のことである。

静養のため訪れていた地元旅館で安中は「肩をもみ終わって酒をすすめられ、常陸山の所望によって歌ったのが安中が幼時より漁舟の上で父の京助から習った『磯ぶし』であった」(『大洗町史』)。

常陸山は安中の声に惹かれた。これが縁で

関根安中

Sekine Anchu

「丑太郎」は「安中」の名で世に出ることになった。「『磯節』を歌って拍手が起これば、何回でもやる。宴席でバカにされても怒ることを知らない。美声と愉快的な性格が常陸山には魅力」(『茨城の顔』)と映ったようだ。

安中は、真っ赤な羽織と紫の袴姿でお供をし、常陸山の部屋(出羽ノ海部屋)を始め、都内の寄席で磯節を歌った。常陸山は地方巡業の際も必ず安中を伴い、後援会の宴席で磯節を披露。こうして磯節は各地に広まっていった。

大正11年(1922)、安中の磯節が民間のレコード会社から発売された。常陸山は地方巡業の折、「郷里の民謡です」とレコードをお土産に配り、安中にも歌わせたという。常陸山が大洗に来ると知らせが入ると、安中は「御大将がくるぞお」と飛び上がって喜び、人力車の音が聞こえると、飛び出して親方を迎えたという。

磯節は常陸山と安中の「二人三脚」で広まった、と言っても過言ではないだろう。常陸山が惚れた安中の磯節は「磯節発祥の碑」に設置された音声(原版の複製)ボタンを押すと、

その美声が聴ける。二人の絆に思いを巡らせて聴いてみてはいかがか(文中敬称略)。

主な参考文献

『茨城の顔』(昭和44年、茨城新聞社発行)、『磯節物語一谷井法童と磯節保存会の五十年一』(平成10年、茨城県磯節保存会発行)、『大洗町史(通史編)』(昭和61年発行)等。



松林に建つ「磯節発祥の碑」
=東茨城郡大洗町磯浜町(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「委ねるとは」のヒント